

令和7年度 山ノ上西古墳現地説明会

～ 発掘調査の成果をいち早く公開 ～

令和8年3月1日(日)

事業の概要

高崎市教育委員会では、令和7年度から山ノ上西古墳（高崎市指定史跡）を保護するため、発掘調査事業を実施しています。

7世紀後半頃（飛鳥時代）の山ノ上西古墳は、東方約300mに位置する山上古墳（特別史跡）と共通点が多く、密接な関係があったことが指摘されています。

今年度は、墳丘に植生していた樹木を伐採して古墳の保全をはかるとともに、石室の羨道・前庭部の調査を行いました。



山ノ上西古墳と山上古墳

古墳の立地

山ノ上西古墳は、山上古墳と同じように柳沢川を南に臨む、尾根の南斜面に築造された山寄式の円墳（径約10m）とされています。

これら二つの古墳の立地については、「北に山、南に川を配置」という、飛鳥で流行していた風水思想の影響がみられると指摘されています。



横穴式石室

山ノ上西古墳は、昭和34年（1959）に群馬大学によって発掘調査が行われました。

埋葬施設は南に開口する横穴式石室（全長約6.3m）であり、石室入口の前には祭祀空間とされる前庭の存在も明らかになりました。

石室は、凝灰岩を丁寧に加工して積み上げた「きりいしきりくみづみ截石切組積」の技法が用いられています。

石室の規模・構造などの諸特徴から、7世紀中葉頃の山上古墳との密接な関係が指摘され、これに後続する7世紀後半の築造年代が想定されています。



山ノ上西古墳の最新調査成果

羨門

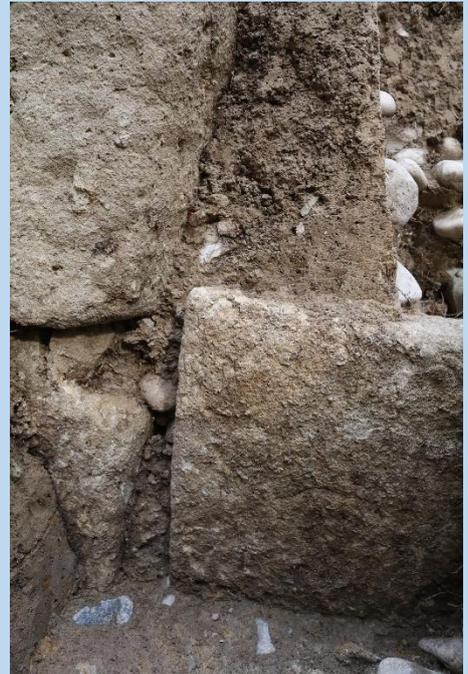
石室入口となる羨門は、群馬大学が調査した東側の羨門石が現存しており、幅約50cm、奥行約40cm、高さ約1mです。

今回の調査では、群馬大学が調査していない西側の羨門石の基底部分を発見しました。床面から上は欠損していますが、東側の羨門石と同じような大きさであったと推測されます。



羨道

羨門と遺体を埋葬する玄室をつなぐ羨道では、群馬大学が調査した凝灰岩の壁材を確認しました。壁面は丁寧に加工されており、当時の石材加工技術の水準の高さを示しています。



羨道東側の壁面

前庭部西側

今回の調査では、群馬大学が発掘していない前庭部西側の調査にも着手しました。

羨門石の西の脇に、凝灰岩の切石を配置し、川原石で前庭部を区画する石垣を構築していたと推定されます。



前庭部東側

群馬大学が調査した前庭部東側では、前庭部を区画する石垣を検出しています。

羨門石の東の脇に凝灰岩切石を設置し、川原石で石垣を構成していた様子を窺うことができます。

